變人の惡い下男がやって參りまして道具でも何でも皆よそにもっていってしまいます。」

これをきいた貧助はブツ〳〵云ひながら

「私にはとても勤儉なんてしみったれた男は使へないハイ左樣なら」、

と怒って出ていってしまいました。

貧助はとう〳〵一生涯貧乏で困難して暮しましたが福藏の方はどん〳〵と御金持になりましたとさ。　めでたし〳〵

慾ばつた罰

彌　彦

むかし或所に一人の大層慾の深いお爺がありました。このお爺さん慾の深いくせに或日自分の虎の子のようにしていた七百圓のお

金を財布に入れたなりおっことしてしまいました。
さあ大變お爺さんは青くなったり赤くなったりして探しまはりましたがどうしてもありません。そこでお爺さんはそこいら中に「もし私の財布を拾って屆けた人には百圓お禮をすると云ひふらしました。すると二三日たって正直そうなお婆さんがこのお爺さんの所へやって參りまして。
「私が大層立派な。財布をひろひましたがもしや之れがあなた樣のでは御座いませんか。」
と丁寧に一つの財布を懷から出してお爺さんに見せました。
見ると自分のですからお爺さんニコ〳〵して。
「ハイどうも難有う。之れが私のです。」

と云ひましたが忽ち心中に例の慾深い心を起しましてどうかしてこの老婆さんに百圓やらない工夫はないかしらといろ〳〵考へましたが。

暫くして。

「たしかに財布は頂きました。唯今調べて見ました所七百圓御座いました。もと〳〵之れには八百圓入れてをきましたのですから。ハヽア。ではもう御禮金の百圓を先におとりになりましたのですね。」

と空とぼけて言ひました。なんと惡ひお爺さんではありませんか。

すると正直一方のおばあさんは大層立腹しまして。

「とんでもない。私は拾ふとすぐもって參りましたので決して途

中でなかのお金などには手もふれは致しません。」
とハッキリ言ひきりましたが。お爺さんは中々きゝません。
「それは。お前さんの業慾と云ふ物んだ。二百圓お禮にとろうとは圖太い。」
と云ってとう〳〵裁判所へお婆さんをひっぱっていきました。
裁判官は二人の申し立てをよくお聞とりになった上。
「サテ。双方の申立にいつはりはないか。」
とお尋ねになるとお爺さんは。
「ハイ〳〵決して〳〵まちがひは御座いません。私の財布にはもと〳〵八百圓は入ってをりましたので御座います。」と申しました。
お老婆さんは又お老婆で口をとんがらかして。

「私はひろひましてからすぐこのお爺さんの宅にもって上りましたので中のお金などには更に手もふれは致しません。」と申しました。そこで賢明な裁判官はお婆さんが正直で可愛いそうだとお察しになったものですから。

「ソレデハお婆さんが拾った七百圓入の財布はお爺さんが落したのとは別物なのに違ひがないですからお婆さんお婆さんが拾った財布の持主が出るまで大事にしまってをきなさい。それからお爺さん。あなたは自分の財布を誰かゞ又拾ってくる迄おまちなさい。」

と云ひ渡しましたあまり慾張ったのでお爺さんは七百圓まる〳〵損をしてしまいましたとさ。めでたし〳〵